

2012年2月9日
第1回都市魅力戦略会議

**「アーツ・カウンシル構想」
「ミュージアム構想」
についての提案**

特別参与 太下義之

1. 「アーツ・カウンシル構想」について

■「アーツ・カウンシル」とは何か

- ・アーツ・カウンシルとは、文化芸術振興に取り組む専門的な組織。アーティストや文化団体への助成、賞の授与、国内外での文化イベントの開催などを主に実施。法人形態は、政府組織、民間組織、または非営利組織などさまざま。
- ・アーツ・カウンシルが事業を決定するにあたり、政治的な干渉を防ぐため、「アームスレングスルール」がしばしば導入されている。
- ・「アームスレングスルール」とは、「政府とアーツ・カウンシルが互いに近い距離の関係を保ちつつ、それぞれ目的を異にする関係や牽制し合う関係であるなど、利害不一致(ないしは対立)の可能性をも保ち、互いに独立の立場を取る」こと。

(資料)Wikipedia, the free encyclopediaを参考に太下作成

ただし、「アーツ・カウンシル」をつくること自体を目的化するのではなく、文化政策の変革のためには、どのような機能が必要なのか、を明確化することが重要。

1. 「アート・カウンシル構想」について

■提案:「おおさかアート・カウンシル(仮称)」の3つの機能



1. 「アーツ・カウンシル構想」について

■何がイノベーションなのか？

①公的助成：「赤字補填の経費」から「未来への戦略的投資」へ

財政事情が厳しい中で、“大阪都民”が納得できる公的助成。

専門家による持続的かつ迅速な審査・評価。目標(文化自由都市・大阪の実現)を共有するアーティストや文化団体とのパートナーシップ及び信頼関係の再構築。経常費補助や複数年補助も制度化。ただし、アーティストも「公的資金」の意味を再考し、キャパシティ・ビルドアップを。

②パイロット・プログラム：行政の「無謬性」ではなく「社会実験」を

新しい助成の仕組みとは、それが成功するかどうかは実は誰にもわからない。社会的ニーズは存在しても、助成対象が不在の場合もある。そこで、新しい公的助成の“種”を探すための社会実験が必要。文化団体や企業メセナとの協働も。

③シンクタンク機能：効果の社会的アピールと不断の自己変革

シンクタンク機能を通じた効果の社会的アピール。アーツ・カウンシル自身の自己変革。さらには、文化政策自体の「グレート・リセット」。高等教育機関との連携も。

1. 「アーツ・カウンシル構想」について

●換言すると・・・

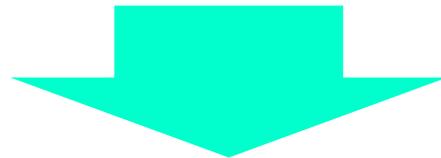
文化振興に“愛”と“情熱”を持った機関の設立。

アーツ・カウンシルそのものが、文化団体の進化型を象徴。

2. 「ミュージアム構想」について

■「ミュージアム」とは何か

- ・近代ヨーロッパで国家が、宗教の代りに見出したのが芸術宗教（芸術崇拜）であり、その「神殿」がミュージアム。
 - ・ミュージアムの思想とは、西欧的な考え方と価値観で全世界を再整序すること。
- (資料)松宮秀治『ミュージアムの思想』より



未来の「大阪都民」のために、
新しい“ミュージアム”的な機構を構想できないか？

2. 「ミュージアム構想」について

■「著作権特区ミュージアム」の提案

- ・著作物の中には、**著者の所在等が不明の作品(オーファン・ワークス:孤児作品)**があり、現行法規のもとでは、その利用には限界があると認識されている。
- ・こうした状況を背景に、「オーファン・ワークス」と考えられる、文化的にも優れた作品(例えば、マンガ、アニメ等)を収集した**「著作権特区ミュージアム」**を整備する。本ミュージアムにおいて展示・公開されることによって、「オーファン・ワークス」と公的に認定。
- ・そして、**ミュージアムの公共機能と大阪のビジネス機能を接続し**、同ミュージアムが窓口となってこれらの**「オーファンワークス」の二次利用**を推進することとする。具体的には、書籍としての復刊、電子書籍、映画化、ゲーム化などを想定する。
- ・なお、当該作品の利用に係る著作権料はミュージアムが積み立てておき、もし将来的に著作権者が判明した場合には、すぐに配分できるようにする。

2. 「ミュージアム構想」について

■提案の背景

●日本の漫画および日本風の漫画を指す“Manga”という単語は欧米にも輸出されている。
…「マンガ」を「第二の浮世絵」にしないために。

●終戦直後から1950年代前半までの間、大阪では「赤本漫画」という文化(&マーケット)が存在した。手塚治虫にとってのデビュー長編であり、戦後日本マンガの出発点とされる『新宝島』も赤本漫画。

●江戸時代中期に大坂で流行した「鳥羽絵」。「鳥羽絵」における誇張と動きは、現代の「漫画」に通じるものとされている。実際に、大正期まで「トバエ」という単語が「漫画」を意味する言葉として使用されていた。

●今日のメディア産業は東京に一極集中。ただし、新しいメディア「電子書籍」は東京でない都市でも展開可能であり、成長産業としての期待。(例:NTTソルマーレ等)。